

MAPPS

Newsletter from MAPPS

頑張れ、ミュージアム。

No.20

2023.06



早稲田システム開発株式会社

東京都新宿区高田馬場4-40-17
TEL:03-6457-8585
<http://www.waseda.co.jp/>

CONTENTS

参加報告

「投開票」が楽し過ぎる展覧会

大阪中之島美術館 開館1周年記念展
デザインに恋したアート♡アートに嫉妬したデザイン

ミュージアムITトピック

Web APIで「未来あるデジタルミュージアム」を創設

おだわらデジタルミュージアム

ミュージアムリサーチャー

「思い出の品」を持ち主にお返しするためのデータベース

いわき震災伝承みらい館
津波遺留品返還事業

お知らせ

【御礼】I.B.MUSEUM SaaSのご導入
施設が500館を突破しました

【御礼】「ミュージアムインタビュー」の
記事が200本を突破しました

参加報告

「投開票」が楽し過ぎる展覧会

大阪中之島美術館 開館1周年記念展
デザインに恋したアート♡アートに嫉妬したデザイン

デザインとアートの違いは、その境界線は。インターネットを検索すると、実にさまざまな記事がヒットします。ふたつの言葉の違いを巡っては、実は多くの議論があるようです。と言うより、たくさんの方がそれぞれのお立場から独自の見解を披露しているのですね。

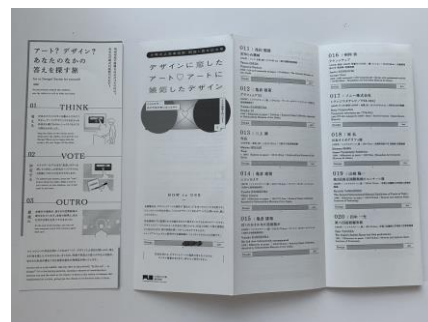
いくつかピックアップして読んでみると、いずれもなるほどと思わされるものばかり。個人的には、ぼんやりとながら「デザインは使うもの」「アートは鑑賞するもの」というニュアンスで理解していたのですが、使うものであっても美観に引き込まれて見入ってしまうこともありますので、この境界線は少し説得力が弱いでしょうか。いやはや、これはなかなかの難問かも知れません。

大阪中之島美術館での打ち合わせの後、見学させていただいた展覧会『デザインに恋した

アート♡アートに嫉妬したデザイン』では、展示作品のひとつひとつに「これはデザイン？ これはアート？」という問いかけが。どちらなのか、来館者の投票で決める…という仕掛けが用意されていました。これは面白い企画ですね。

投票には、用意されているデジタルデバイスを使います。表示されたスライドボタンを左に動かすとデザイン、右に動かすとアートなのですが、二者択一を迫らず「真ん中より少しデザイン寄り」といった曖昧な答え方もできる点がポイント。これなら、いざ投票となっても決められずに長時間悩んでしまう心配もありませんね。

というわけで、これは家電だからデザイン、これはアート作品…と、最初は直感でスイスイとバーを動かしていたのですが、途中から雲行きが怪しくなってきます。答をどちらかに振り切れなくなって、う～んと唸って、やや中途半



端な位置に置くようになり、最後は真ん中付近のどちらとも取れるようなところにセットして退散してしまいました。

さあ、結果はどうなのでしょう？ 皆様はどんな判断を下したのか？ という一番いいところで、何と仕事の携帯電話が鳴り、やむなく会場を後にすることになってしまいました。「開票」が見られなかったのは残念でしたが、ひと振りのスパイスで高揚感がグッと上がる展覧会でした。



大阪中之島美術館
開館1周年記念展
デザインに恋したアート♡アートに嫉妬したデザイン
2023.04.15 - 2023.06.18
<https://nakka-art.jp/exhibition-post/design-art2023/>

ミュージアム
ITトピック

Web APIで「未来あるデジタルミュージアム」を創設

おだわらデジタルミュージアム

学芸員が厳選した小田原市の収蔵資料を、特別コンテンツのジャンルやテーマごとに閲覧できる『おだわらデジタルミュージアム』。収録コンテンツは多岐にわたり、高精細画像や3Dコンテンツ、VRツアー、映像や年表、キッズコンテンツやまち歩きをしたくなる文化財マップ…など、まさに充実の内容です。実は非常に短期間で準備されたもので、推進する中では思わぬ成果もあったとか。ということで、今回は注目のデジタルアーカイブ事業の舞台裏取材しました。



おだわらデジタルミュージアム トップページ <https://odawara-digital-museum.jp/>



短期決戦の作業とは思えない仕上がり

今回お話をうかがったのは、小田原市郷土文化館の鈴木 悟さんと吉野 文彬さん。鈴木さんは、以前の勤務先である小田原市立中央図書館が古文書や絵図など貴重な資料を豊富に所蔵していたことから、文化資源のデジタル活用について着目。当時はまだ「デジタルライブラリー」「電子図書館」と言われていましたが、その頃からIT企業の社員を相手に議論を交わしていたそうです。

小田原市郷土文化館に着任後にはその想いがさらに強まり、吉野さんとともに資料整理やデジタル化の必要性を痛感する日々を送っていたところ、総務省のデジタル田園都市国家構想推進交付金の話が舞い込みます。デジタル化を一気に進める千載一遇のチャンスと考えたお二人は、本腰を入れて取り組むことを決意。自館に加え、市の

文化資料のポータルサイトという主旨のもと小田原城天守閣や小田原市尊徳記念館、小田原市立中央図書館、小田原市郷土文化館分館 松永記念館そして文化財課も参加する一大プロジェクトとなりました。

最初のミーティングは2022年3月に行われました。性質の異なる施設が集まってのデジタルアーカイブ事業は、完成すれば素晴らしい成果が得られる半面、調整が非常に難航しがちです。同プロジェクトもその例に漏れず、データ項目の設定から苦労の連続だったようですが、関係者の皆さんの並々ならぬ熱意によって最短期間で乗り越えて、デジタルミュージアムが完成。2023年3月末に、無事に公開へと漕ぎ着けました。

アクセスしてみると、これを短期集中で仕上げたとは思えないほど素晴らしい出来栄え。ここでは、鈴木さん・吉野さんにうかがった舞台裏のエピソードとともに、その魅力の一端をご紹介します。



劣化が進む資料の保全にも貢献

まず、トップページのスライドショーから。使われている素材は、弥生時代中期中葉における東日本最大級の規模を誇るという市内の中里遺跡から出土した「中里式土器広口壺」です。この遺跡の出土品は、関東地方における稲作農耕社会への転換期の様相を解明する上で、極めて重要な資料とのこと。小田原市の豊富な文化資源を検索できるデジタルアーカイブの「表紙」としては最適なチョイスと言えるでしょう。

このスライドショーもそうですが、サイトを順に閲覧してみると、画像の美しさにお気付きかと思います。交付金を活用した今回の事業では、1億画素まで撮影できる高性能なデジタルカメラを購入。その威力は絶大で、むしろ肉眼で見るとよりも細部まで鮮明な画像を提供することができるそうです。たとえば

背広なら、ガラス乾板の保存状態が良好だったので、布の質感まで確認することができるとか。専門機材ということで撮影作業は専門業者に委託しましたが、カメラ自体は手元に残ったため、今後は職員がコンテンツを増やしていくことも可能になりそうです。

画像とともに印象的なのが、映像資料もアーカイブされていること。小田原市では、昭和40年代前後に撮影された16ミリフィルムを数多く所蔵しており、そのうち郷土に関するものは126本も所蔵しているそうです。地元の地誌を中心とした紀行系の映像で、長く市の視聴覚ライブラリーに保管されていたのですが、これらを今回の事業で一気にデジタル化。デジタルミュージアムでは、現在70本ほどの映像が公開中です。

今回のデジタルミュージアムは、市内の文化情報をオンラインで広く一般公開できたこともさることながら、劣化が心配されていた多数の資料がデジタルデータ化されたことも大きなポイントです。上記の映像フィルムの

ほか、たとえば古文書や古絵図などのデジタル化も大きく進展。これらの資料は、以前は書面で申請した希望者へのみ専用の場を用意して公開してきましたが、高精細画像の公開によって閲覧のハードルが大きく下がることになりました。館側も閲覧者側も労力を削減できますが、加えて、資料を広げたり巻き直したりする作業がなくなることで劣化が進むのを食い止めることができます。保存状態が気になる資料については、デジタル化は絶大な効果をもたらすわけです。

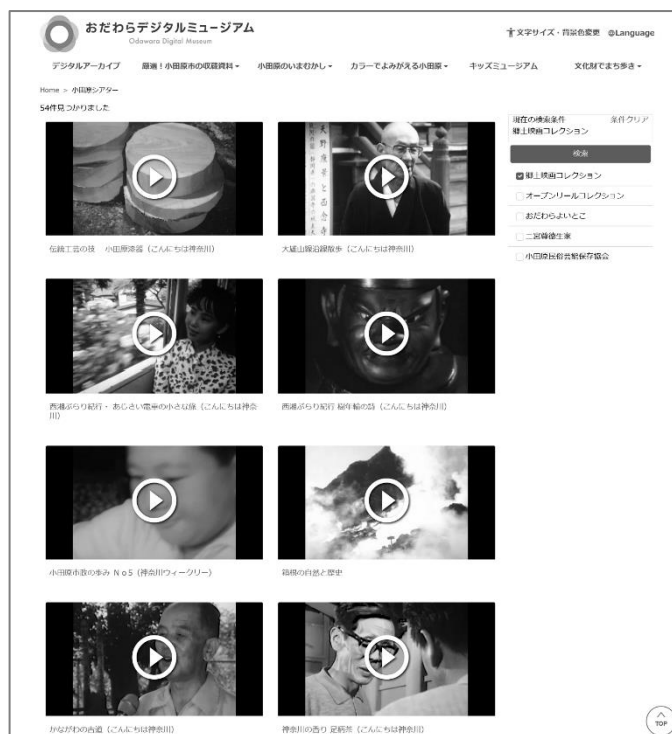


先生方も使いやすい
キッズミュージアム

さて、サイトに戻りましょう。おだわらデジタルミュージアムには、「キッズミュージアム」という子ども向けのコーナーも用意されています。最近では、好奇心旺盛な子どもたちがタブレットを操作して情報にアクセスする姿も

お馴染みとなりましたが、教育現場では学術関係者や博物館学芸員が文化資源情報のデジタルツールを使って授業を行ったという話も珍しくなくなりました。ただ、学校の先生方も積極的に利用しているかと言えば、実際はかなり難しいようです。なにぶん多忙な中ですので、事前の下調べなどの負担の大きさを考えると、やむを得ないところでしょう。

ところが、おだわらデジタルミュージアムでは、その点もすでに対策済みでした。キッズミュージアムの企画制作にあたっては当初から小田原市の教育研究所が参画していたそうで、メインのコンテンツは実は教室で長年にわたって愛用されてきた副読本が元となっているのだとか。紙からタブレットに移っただけなので先生方にも使いやすく、しかもPDFではなくHTML形式で作られているためデジタルアーカイブとの連携もバッチリ。なるほど、この形式なら教室でも大いに活用されそうです。



小田原シアター 郷土映画コレクション



キッズミュージアム わたしたちのおだわら



おだわら文化財マップ



Web APIの活用で 大きく広がる可能性

教育現場での活用と言えば、今回のデジタルミュージアムは、将来的には防災面での貢献も見据えているとのことでした。あの東日本大震災以降、大規模災害の教訓を後世に残すために建立された自然災害伝承碑が大いに注目されるようになりましたが、実は国土地理院のホームページで全国マップとして閲覧することができます。今後はこうした外部コンテンツの連携・活用も進め、多方面に役立つデジタルミュージアムへと育てていきたいとのことでした。

こうした姿勢を示す好例が、小田原市の都市OSを通じて提供されているデータを活用する「小田原さんぽ」といま歩きアプリです。都市OSとは、住民に最適化されたサービスの提供などを実現するソフトウェア基盤のこと。おだわらデジタルミュージアムでは、I.B.MUSEUM SaaSのWeb APIを取得して情報を発信していますが、そこに都市OSが連携すれば、同じ自治体内のさまざまな部署でのデータ活用が可能になります。たとえば、前述の自然災害伝承碑マップなら、取得したデータを市のハザードマップ上に表示することも実現可能となるでしょう。

このように、Web APIを上手に活用すると、多様なシーンを最適なデジタルデータで彩ることになります。I.B.MUSEUM SaaSの場合は、デジタルミュージアム用のデータをシステム上で追加・更新すると、その情報が他部門のツール内で発信する情報へと自動的に反映される仕組みを構築することも可能。二度手間がなく、作業負担ゼロで、そのデータをより多くの人々に提供できるわけです。

こうした背景から広く展望が開けるデジタルミュージアムですが、一方で、そこに到達するにはいくつかの課題もあります。たとえば、



鉄黒漆塗紺糸素懸威伊代札二枚胴具足。
こちらは迫力たっぷりの実物。



デジタルミュージアムでは、展示室では見られない背面などもじっくりと鑑賞することができます。



トップページに掲載されている中里式土器広口壺は
小田原市郷土文化館に展示されています。



同館展示室では、QRコードからデジタル
ミュージアムに誘導する仕掛けも。



小田原城や二宮尊徳生家をはじめとする、小田原市内の8つの施設を、VRで巡ることができます。

こうした情報満載のコンテンツは、有料サービスとして運営されてきた例も少なくありません。同様のコンテンツをオープンデータとして公開すると、これまでの収益力を失うことを意味するため、サービスの提供法についての考え方を関係者間で統一しておく必要があります。複数館が参加するデジタルアーカイブは項目設定など細部の協議が必須となりますが、時には自治体の住民サービスにまつわる方針などにも影響することがあるため、事前の意思確認・統一が重要となるのです。



公開がゴールではなく、
そこからがスタート

今回の事業の全体像についてうかがったところ、あくまでデジタルミュージアムの「創設」業務と位置付けているとのことでした。よく使われる「構築」ではないのは、デジタルミュージアムの開設は、プロジェクトのゴールではなく、そこから続く長い歴史の最初の1ページというニュアンスを重視しているため。その一環として「未整理の資料があることを市として新たに認識する機会」に恵まれたことは、デジタルアーカイブの整備とは別の大きな成果になったそうです。最後に、このエピソードをご紹介します。

小田原市郷土文化館の学芸員は、現在、考古担当2名、美術担当1名の3名体制で、自然史の担当がいません。一方、館では自然科学分野の標本を数多く所蔵していること

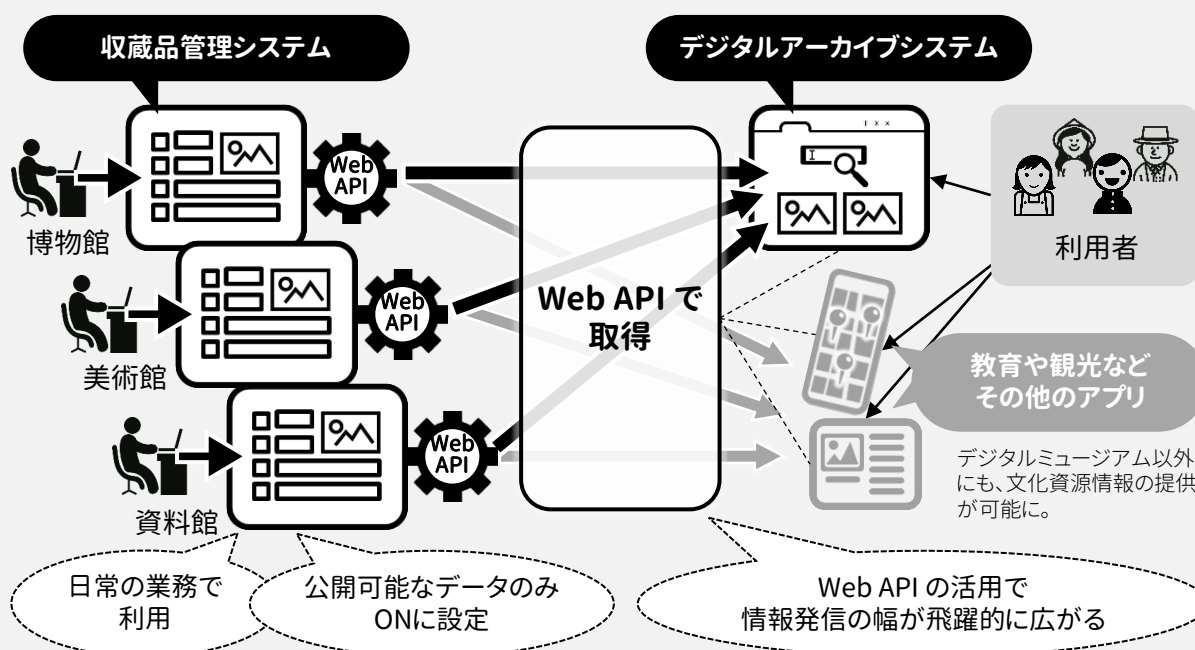
から、市内にある神奈川県立生命の星・地球博物館と横須賀市の観音崎自然博物館の協力を仰ぎ、デジタル化の作業と並行して標本の同定を進めることになりました。その過程で、昭和30年代に江の島ヨットハーバーが造営されて以降、相模湾では目撃情報が途絶えていた海藻類の標本が見つかりました。これは、県内でも非常に珍しい貴重な資料とか。つまり、今後の展示にも影響する大発見となったわけです。

ご覧になればお分かりの通り、堂々たる出来栄となったおだわらデジタルミュージアム。しかし、デジタルアーカイブは公開がゴールではなく、そこからが始まり。コンテンツを継続的に拡充し、利用者の幅を広げる活動を継続してこそ、資料や施設の価値を高めること。その重要性を改めて学ぶ教材となりました。



おだわらデジタルミュージアム <https://odawara-digital-museum.jp/>

おだわらデジタルミュージアムでも利用されている、I.B.MUSEUM SaaS の Web API 出力機能





「思い出の品」を持ち主にお返すためのデータベース

いわき震災伝承みらい館 津波遺留品返還事業

福島県いわき市のいわき震災伝承みらい館では、東日本大震災の関連資料を「震災アーカイブ検索」としてオンラインで一般公開しています。その一方で、同館が保管する多数の津波遺留品については、令和4年11月から館内のみでデータベースの公開が始まりました。I.B.MUSEUM SaaS の「ふたつの公開機能」を利用したのですが、インターネット公開と館内での限定公開、同じ震災関連資料をまったく性質の異なるデータベースとして運用しているのはなぜなのか。今回は、同館の坂本 美穂子さんにお話をうかがいました。



津波遺留品 返還事業とは

東日本大震災では、津波によって多数の尊い命が失われたとともに、大量の家財道具が住まいごと押し流されました。その後、いわゆるガレキ撤去作業等の中で多くの品々が回収されましたが、その中には写真や位牌など、持ち主が分からなくてもご本人やご家族にとっては他に代えがたい価値を持つものが多数含まれています。これらは、津波遺留品と呼ばれています。国は「ほかの災害廃棄物と一律に処分せず、所有者らに引き渡す機会を設けてほ

しい」という主旨の指針を定めており、今も被災自治体の多くが膨大な数の品を保管しています。しかし、あれから10年以上が経過した現在、保管場所などの問題も深刻になってきたことから、泣く泣く返還事業を終了する自治体が目立ち始めました。すべてを永久に保管するのが困難であることは容易に想像できますが、ここに来て、そろそろ限界に達した自治体が増えてきたのです。

そんな中、津波遺留品をデータベース化して来館者に情報を提供するという取り組みを開始した館も。それが、今回お話をうかがった福島県いわき市のいわき震災伝承みらい館です。



福島県いわき市の 津波遺留品返還事業

令和4年8月、いわき市が実施した「思い出の品(津波遺留品)展示・返還事業」には、121名の方々が来場されました。写真やアルバム、位牌のほかバッグ、トロフィー、カメラ、賞状、書籍などが陳列されましたが、うち41点が持ち主のもとに返還されたそうです。10年越しの再会を果たした方々の想いは、察するに余りあります。

会場では、実物を見て自分のものであるかどうかを確認できました。しかし、それぞれのご事情で会場に足を運ぶことができ



左：データベースを「ランドセル」で検索
上：「ランドセル」1点の詳細画面。画像の拡大もできます。



なかった方々は、ご自身の思い出の品を探す方法がありません。そこで、引き続き津波遺留品を保管しつつ、いつでも探すことができるよう専用のデータベースが公開されることになったのです。



ふたつ目の 公開ページ機能を 活用

いわき震災伝承みらい館が保管する津波遺留品は約5,000点にのぼります。今回のデータベースでは、そのうち、3,000点以上もの画像を館内で閲覧することができるようになりました。I.B.MUSEUM SaaS の機能の一部である「ふたつ目の公開ページ」を活用し、オンラインで運営中の震災アーカイブ検索とは完全に別のサービスに。ただし、津波遺留品は被災者のプライバシーに深く関わる品々であることから、館内限定となったのです。

氏名などの所有者情報がない遺留品は、

画像が有力な手掛かりとなります。一枚ずつ確認しながら探すのはかなりの難作業ではありますが、この新データベースには「少しでも被災者のもとにお返ししたい」という人々の心が滲みます。

いわき市では、当面、返還事業を継続する意向とのことです。やはり保管場所の問題は大きく、市の各部署と協議しながら何とか確保している状況とか。そして、何より新たな生活に馴染んできた被災者の想いにも変化が見られ始めるとのこと。そこには、12年という長い時間の経過を実感せずにはいられません。

これまで一貫して被災者の心情に寄り添いながら展示会の開催やデータベースの構築を進めてきたいわき震災伝承みらい館も、最近はそのような状況の変化をよりつぶさに見定めているとのこと。被災者の声に耳を傾けつつ、継続時期などについても見極めながら、今後の返還事業の方向性を検討していくようです。



ひとりでも多くの 被災者に 思い出との再会を

資料情報の継承という重責を担うミュージアムのデジタルアーカイブですが、コロナ禍でも証明された通り、「実物を公開できない時の代替策」ともなり得ます。膨大な数の津波遺留品の実物を陳列できる機会は限られますが、デジタルアーカイブであれば、広いスペースを用意する必要がない分、館や自治体の負担も和らぎます。多くの人々の想いに支えられて公開へと漕ぎ着けた「津波遺留品データベース」。ひとりでも多くの被災者がご利用になり、ひとつでも多くの再会が生まれることを願うばかりです。



いわき震災伝承みらい館
<https://memorial-iwaki.com/>
震災アーカイブ検索
<https://jmapps.ne.jp/memorialiwaki/>

いわき震災伝承みらい館

東日本大震災で甚大な被害を受けたいわき市の震災体験を捉え直し、教訓を後世に伝承することを主目的に、2020年5月に開館しました。パネル展示や大画面の映像、タッチパネルやVR映像、ハンズオン展示など多様な手法で震災の様子を伝えるほか、旧・いわき市立豊間中学校の卒業式当日、震災発生の直前に生徒たちが寄せ書きを残した黒板の展示も。震災語り部の定期講話もあり、年月が経つほどに役割の重みを増すであろう重要施設です。



【御礼】I.B.MUSEUM SaaSのご導入施設が500館を突破しました

今年の3月末時点で、弊社のクラウドサービス I.B.MUSEUM SaaS の導入館(機関)が500施設に到達。その後も順調に増え続けております。まずは、皆様に心よりお礼を申し上げます。

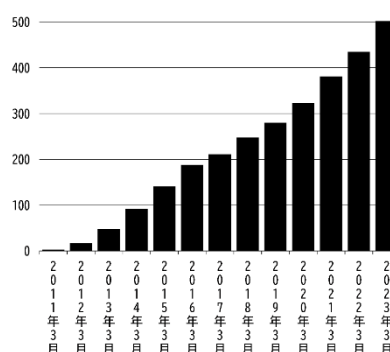
I.B.MUSEUM SaaS は、2010年にサービスを開始しました。この頃は、社会全体のデジタル化の波の中、大多数のミュージアムが深刻な予算不足、人員不足に喘ぎ、他業種と比較してシステム化が遅れていました。現場で苦悩する方々を目の前にした弊社は、低コストで導入できる仕組みを開発。当時、収蔵品管理システムのクラウド化はほぼ不可能と目されていたため、この取り組みが受け入れられるかどうかは未知数でしたが、

そんな時代を乗り越えて、順調にユーザー数を増やして参りました。これもひとえに多くの皆様方のご支持の賜物と、深く感謝しております。

サービス開始から今日まで励ましやご助言をいただいて参りましたが、皆様のお声はシステム機能の発展に直結しております。ご希望・ご要望はそのつど社内での機能の改善と追加を実施してきました。文字通り「全国のミュージアムの皆様に育てていただいたシステム」なのです。

現在、I.B.MUSEUM SaaS は、学芸員や職員の皆様にさらに使いやすい道具としていただけるよう、インターフェイ

スの全面リニューアルに取り組んでおります。ここでも多数のご要望が実現いたしますが、完了以降も現場の声に丁寧に耳を傾けながら、末永く発展するシステムを目指して参ります。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。



【御礼】「ミュージアムインタビュー」の記事が200本を突破しました



2005年から現在まで続く弊社ホームページの名物コーナー「ミュージアムインタビュー」。弊社代表がシステムのユーザの皆様の現場にお邪魔して直接コメントをいただく取材記事ですが、こちらも先ごろ200本を突破しました。ご協力くださった皆様、誠にありがとうございます。

記事中では、ご導入の経緯やエピソード、今後の目標からシステムへのご要望点、ご不満点まで細かくうかがっておりますが、その中では取材者が驚くようなアイデアをいただくことも。学芸業務の現場におられる方なら、きっと発見があるのではないかと思います。

足掛け年の長寿コーナーとなりましたが、今後も元気に続けていきたいと思っております。いずれ皆様のもとにもお邪魔するかもしれませんので、その際にはぜひよろしくお願い申し上げます。



ミュージアムインタビュー http://www.waseda.co.jp/museum_interview

編 集 後 記



展示室に設置したデジタルデバイスを活用する参加型の展覧会、多くの人に情報を届けるデジタルミュージアム、被災者に「思い出の品」を届けるデジタルアーカイブ。今回お届けいたしました記事は、いずれも「利用者との関わり方」が重要なテーマとなっています。

博物館法の改正もあってか、最近は「社会におけるミュージアム」が議論される機会が増えてきました。今回ご紹介した3つの事例では、人々との関わり方の幅を広げる上で、ITの利点が上手く活用さ

れています。これから、デジタル技術がさらに進化していけば、ミュージアムはより多様な形で利用者の日常に貢献していくことになるでしょう。

最後のページでは、500と200という弊社の2つの数字をご紹介しました。13年と18年、長いようで短かったというのが実感ですが、まだまだ道半ば。博物館と人の関わりをサポートするシステム開発会社として、今後も精進して参ります。